

# 『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その11

報告「IUFRO（国際森林研究機関連合）DIV.5の国際会議に参加して（第2回）  
長濱和代（林業経済研究所）」

2023年6月4日から9日まで、オーストラリアのケアンズにてIUFRO（国際森林研究機関連合）Div.5（林産物や木材の持続的利用部門）により開催された国際会議とエクスカージョン（遠足）に参加した。今回は国際会議の報告の後半として、世界最古の熱帯雨林と言われるキュランダへのツアーとクイーンズランド州立ウォークミン研究所を訪問した時のエクスカージョンとともに、前回と同様に時間軸に沿って、筆者の行動と考察も交えて、報告をさせていただく。

## 【6月7日】会議4日目

朝はまた鳥の声で目覚める。海が近いので、海洋に生息する海鳥であろうか。日本やインドでも聞いたことのない鳴き声である。乾季に入っていたが今朝も雨が降り、太陽も見え隠れしていた。降雨量が多く、雨と晴れが同時に出現する天候により、熱帯雨林がよく育つのだろうと考えながら、トイレに移動すると、窓から虹がかかっているのが見えた。日本では夕立ち後に虹が見えことがあるが、ケアンズでは朝から虹だ！前日のセッションで自分の発表が終わったばかりだったので、ステキなギフトをいただいた気分になり、嬉しく思った。

宿泊していたドミトリー<sup>注1</sup>は、木造の戸建てで、床も壁の木材のフローリングが敷き詰められていて、窓枠も木でできている。木造の家は癒しの力が感じられよく眠れるのだが、隣室の音やドアの開閉音が聞こえるので、隣人に気遣いをして生活する必要がある。5日間滞在していたので、食事（自炊が基本）や共同浴室へ移動する際などに、隣人に挨拶をして話が済み、隣人との距離が少しずつ縮まっていくことが実感できた。

この日も、朝から国際会議のプログラムに参加する。メイン会場と2つのサブ会場があるので、メインセッション後に3つの分科会がテーマ別で議論が展開されていた<sup>注2</sup>。私はメイン会場に残り、テーマは「大型木材と構造用木材」で自分の専門とはやや外れるが、発表者のプレゼンを興味深く聴いた。とりわけ初日にUSDA（米国農務省）に所属するネパール人研究者のPrakash Nepal博士と話をしていたので、どんな発表をするのだろうかに関心があった。南アジア出身のPrakash博士は、大学卒業後に渡米して、大学院で博士取得後に米国に留まりUSDAに就職をしたとのことで、経済社会的な知見から研究を蓄積しているそうである。セッションでの口頭発表では、米国の住宅と非住宅建設活動について、多くの木材を利用することにより想定される二酸化炭素排出量から、社会的な利点を予測する内容で、私も利用してきたSTATAなどの統計ソフトを使用して分析を行っていた。私は彼の出身地である南アジア地域についての研究に期待を寄せていたが、米国の国益になる知見からの研究が所望されるのであろうと考えた。さらに母国を離れて米国での生活が長く、米国農務省の森林局で研究を続けることで米国人としての考え方が身につくのかもしれない。Prakash博士は、学会開催中、常にネクタイを締めてスーツを着こなし、聴衆に語りかけるような見事なプレゼンを披露していた。本人からの希望があり、プレゼンの時の写真を撮影してお送りした（写真1）。

ランチタイムは、前回にも書いたようにブッフスタイルで、研究者の交流を深めることができる。いつも固定されているグループは少数なので、周囲の様子を伺いつつ、近くの研究者に積極的に話をするため、プレートを持って他のテーブルを回ってみる。何日か繰り返すと次第に顔見知りが増え、会って話す機会が楽しみになる。最終日は「やあ、元気？」と挨拶できる人たちばかりになったらよいが、数百人もいるとなかなか難しい。それでも中国人やインド人の研究者グループと知り合いになり、名刺交換をして、そのうちの何人かは現在もSNSやメールでつながっている。その数か月後、調査でインドを訪問した折には、研究機関を訪問して「IUFROで知り合った研究者の長濱」と紹介され、組織の研究仲間と交流して、自宅に呼ばれて食事会を開いていただく関係に発展していった。今後の国際規模での研究につなげられ



写真1 USDAに所属するPrakash博士の口頭発表（筆者撮影）

たらと思う。

ランチ後の午後のプログラムでは、メイン会場に参加者全員が集まり、エレベーターピッチ・セッションが企画された。「エレベーターピッチ」とは、エレベーターに乗っている位の短い時間でアピールをするプレゼン手法である。このセッションでは、1人5分間で自分の研究や実践を披露する。パワーポイントを使っただけのプレゼンがほとんどであり、14名が参加した。日本からは木材利用研究会の事務局をされている長坂健司さん（東京大学）が、環境活動に関する情報開示と木材産業の企業価値について、緻密に書かれた複数のスライドを使って短時間で効果的にプレゼンをされた。セッションごとの発表とは異なり、ホールで100人以上の聴衆に自分の研究を披露できる利点があるが、会場での個別の質疑応答が難しいため、ランチやお茶の時間にプレゼンターを見つけて話しかけるのが良いと思われた。中国人研究者からは、プラスチックの代替品として竹の可能性についての研究発表が複数あり、その後の交流会では竹でできたストローや紙をいただき、「竹をパルプにすれば様々な製品が作れるよ！」との情熱的な解説をいただいた（写真2）。中国では、世界に先駆けてプラスチック製品が竹製に変わっていくのかもしれない。



写真2 中国人研究者らが開発した竹ストロー（筆者撮影）

午後のセッションを経て、19時からメイン会場で最大の夕食会であるカンファレンス・ディナーが開催された（写真3）。各テーブルに着席して、主催者の挨拶と貢献団体の表彰、そしてアポリジニの歌と演奏に始まり、音楽グループのライブ演奏、食事会の後は研究者たちが舞台上がってダンスタイムが始まった。多くの研究者が舞台上上がり、酔いも忘れるほどに歌って踊り、熱く盛り上がり、森林にかかわる研究者たちの勢いが実感できた。



写真3 海外の女性研究者たちとテーブルを囲む（USDAの研究者撮影）

終了後は、「夜も遅く一人でホテルに戻るのは危険だから」と、知り合いになったインド人研究者が私のゲストハウスまで送ってくれた。宿につくと、彼はホテルを見上げ、「自分はもっと安いホテルに泊まっている。それでも今回の学会でかかった費用は、給料一か月分以上で、教授レベルは出張旅費を国がサポートしている。先進国はすべての価格が高いね。」とつぶやいて、自分の宿へ帰っていった。国家間だけでなく、研究者間の経済的格差を実感した。

## 【6月8日】5日目 個別のエクスカージョン

ケアンズといえば「キュランダ鉄道」という列車が有名である。キュランダという街へ行くための観光列車でもあり、一度は乗車できればと思っていた。翌日の学会全体のエクスカージョンでもキュランダを訪問するのであるが、その手段は「スカイレイル」というモノレールとのことで、「ここで乗るしかない！」と考え、前日にケアンズ駅のインフォメーションセンターでチケットを購入した。繁忙期でないため、前日でも普通クラスの窓際席が往復72ドル（約7100円）で購入できた。ゴールドクラスでは、49ドルを追加して、アルコール等のドリンクと軽食のサービスを受けられるとのことで魅力的だったが、車窓からの風景をしっかりとこの目で見て心に留め、片道



写真4 キュランダ鉄道の列車から臨むジャンガラループ（筆者撮影）

約2時間の鉄道旅を満喫したいと思い、普通席にした。もし、読者の皆さんが鉄道好きでアルコールにも強いのであれば、ゴールドクラスをすすめたい。

朝8時半にケアンズ・セントラル駅を出発、途中、フレッシュウォーター駅を通過して、15分くらいすると、90度以上はカーブしていると思われる見所「ジャンガラループ」を通過する。車内アナウンスも入り、列車のスピードもやや遅くなり、写真撮影ができる（写真4）。乗っている

列車が見えるカーブは珍しく、「世界の車窓から」(テレビ朝日)でも放映された場所である。次に現れるのが、いくつかの滝である。最初にストーニークリークと呼ばれる滝の横の横を列車で通過した後、次にバロンフォールズと呼ばれる滝が遠方に、手前にはスカイレイル(モノレール)が見えた。ここでは滝の名前が付いたバロンフォールズ駅があり、10分間の下車ができるため、遠くまで広がる熱帯雨林と滝を十分に堪能できる(写真5)。

10時半に目的地のキュランダ駅に到着。駅を出て、バロン川方面へ向かうと、「ボートツアーあり」との看板を見つけた。次のツアーは10時45分からとのことで、45分間のツアーで大人18ドル。幸いにも空き席があったので、飛び込みで参加させていただいた。ツアー<sup>注3</sup>では、野鳥だけでなく、カメや野生のワニが泳いでよる様子も観察できる。また熱帯雨林を開いて、コーヒーの木を植林した地元住民の林地(庭)が見え、観光客を喜ばせるために、野鳥を飼育している場所にも案内いただくなど、自然と観光の両立を目指そうと地域で取り組んでいる様子が観察できた。

その後、キュランダの街を歩き、キュランダ産のコーヒーを飲んだあとは、インフォメーションセンターへ。60歳を優に超えたと思われた女性らが華やかなブラウスを着て、丁寧に案内をしてくれた。世界最古である熱帯雨林ハイキングコースがあるそうで、案内に従い、残りの1時間くらいを森の散策をすることにした。天然林で覆われた林内は水辺もあり快適な空間で、コースの最後はボートツアーをしたバロン川へと続いている。何千年も生きた巨木に出会えるかと期待していたが、見つけることができず、何百年に数回は伐採されてきたのかもしれない。

キュランダ駅からの帰路、列車内の隣席で日本人の女性に出会った。キュランダで初めて見つけた日本人で、オーストラリア人の女性とペアで電車に乗りこんできた。バロンフォールズは、今は乾季で雨量が少ないが、雨季の時期は水量が増えるため、季節により表情が異なり面白いから、時期を変えてまた来てはどうかと勧められた。二人とも夫が医者で、夫の学会に同行してきたそうで、夫と共に海外を巡ることができ楽しそうに見えたが、さらに話すと、日本人女性は元看護師で、子どもがほしくて仕事をやめて専業主婦となり、現在は親の介護で忙しくしているとのことであった。男性は仕事で女性は夫の後方支援というカップルは少なくないが、社会通念に縛られ自らの希望で選択していないとすれば、社会は男女平等ではないと思われた。もう一人の現地の女性は、看護婦の仕事を続けながら何人も子どもを育ててきたそうで、人生の至福の時間は、夜に一日を振り返り仕事を通じて人生に満足感を見出す時間だと語った。人生について満たされているか(充足感)、私たちは至福を味わえているのか(幸福感)。列車の中で、生きることの意味について話し合う機会をいただいた。

午後3時頃にケアンズ・セントラル駅に帰着した。学会では午後1時にクロージングセッションがあり、この日は各セッションに分かれて、発表者同士でテーマの振り返りと交流を深めたとのことであった。自分は、熱帯雨林への列車旅を企画したので、参加が難しくなったが、知り合った研究者とは、今後もネットワークを深めていきたいと考えている。IUFROで得たネットワークによるその後の交流については、また別の機会に書かせていただきたい。



写真5 バロンフォールズ駅から望む熱帯雨林と滝(筆者撮影)



写真6 スカイレイル(モノレールから)の熱帯雨林の眺め(筆者撮影)

### 【6月9日】6日目(最終日)全体でのエクスカッション

朝、ヒルトンホテルに集合して、バスに乗りこみ、午前中はスカイレイルを使って再びキュランダを訪問した。前日に続いたの熱帯雨林へは、陸路ではなくモノレールを使って空からのアクセスである(写真6)。価格も上がり、昼食代やバス代も込みの日帰りツアーに250ドルをIUFRO事務局へ支払いをした。高額ではあるが、空から森を眺めることができるのは、スカイレイルの利点である。

キュランダの老舗ホテルでランチを食べた後、数十年前の写真が展示されていて、じっくりと見る時間があった。その写真

に写っている立木は、直径が人の身長近くもあり、切り出されていく様子がわかり、この周辺の原生林は伐採されていることが推察された。

午後は州立ウォークミン研究所<sup>注4</sup>と林地や農作地等の関連フィールドを訪問した。研究所へ入る際には、外部からの細菌・ウイルスなどの除去と消毒を兼ねて、私たちの履き物だけでなく、バスのタイヤまで消毒液に浸されてからでないとい入所できなかった。研究所では幅広く科学研究開発(R&D)を推進していて、クイーンズランド州の熱帯園芸と作付環境の改善のために、灌漑設備や熱帯農業システムを取り入れていた(写真7)。

研究所訪問のあと、最後のティタイムがあり、若手の現地の大学助手がスーパーで買って来たばかりのおやつや飲み物を参加者で分け合い、ふり返りをした。私たちは、アジア・オセアニア地域だけでなく、欧米やアフリカからなど国籍の異なる研究者集団であったが、毎日、顔を合わせてきたので、皆ファミリーの一員のような気持ちになった。道中、オージーの英語は難しいと感じる場面もあったが、最後は手を振って、感謝の気持ちで別れができたのがよかった。



写真7 州立ウォークミン研究所の植林地を訪問(筆者撮影)

今回のIUFRO参加後に、同じセッションで知り合ったインドのFRI (Forest Research Institute) の研究者とやり取りが続き、2023年8月のインド訪問ではFRIを訪問して再会することができた。研究所内の図書館や大学を案内いただき、組織を通じての共同研究の可能性について話し合った。海外共同研究のファンドがとることができたら、ぜひ実行に移したい。

学会を通じて知り合った北欧の研究者からは、2024年6月にストックホルムでIUFROの全てのDivisionが集う5年に一度の大会があり、申し込みをするように誘われたので、ケアンズで要旨を書いて申し込みを済ませた。先立つ資金の有無と職場で休暇申請ができるかは微妙であるが、昨年末に要旨がアクセプトされている。

こうした機会をいただいた林業経済研究所の土屋所長はじめ研究所の皆さまに感謝申し上げます。研究発表については、科研費(21K12398)により渡航費の支援を得た。その他、ご支援をいただいている関係者の皆さまにもお礼を申し上げます。

#### 【文末脚注】

注1. Travellers Paradise Heritage Historical Guest House

住所: 187 Bunda Street, Parramatta Park, Cairns Central, 4870 ケアンズ, オーストラリア

注2. IUFRO2023@Cairnsの各セッションのプログラムはこちら(英語)

[https://www.iufro-div5-2023.com/\\_files/ugd/39a717\\_8bd4535d5dad4d75bea6bfe20f6c68d3.pdf](https://www.iufro-div5-2023.com/_files/ugd/39a717_8bd4535d5dad4d75bea6bfe20f6c68d3.pdf)

注3. キュランダ・リバーボート・ツアー(英語) <https://kurandariverboat.com.au/>

注4. クイーンズランド州立ウォークミン研究所のウェブサイトはこちら(英語)

<https://www.daf.qld.gov.au/contact/stations-facilities/walkamin>  
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0264127523002277>